

翻訳ってなんだ？

ちくまゆみい

◆私が翻訳者になったわけ

いつのまにか翻訳者になっていたというのが事実なのだが、思い返せばきっかけはいろいろあった。私の叔母の一人がアメリカに住んでいて、英語の絵本を送ってくれたことがある。一冊は『アルプスの少女ハイジ』を英語に抄訳して絵をいっばいつけたもの、もう一冊はプロヴェンセンの『マザーグース』だった。送ってくれたのが小学生の時だったのか中学生になってすぐだったのかは覚えていない。でも、中学生になって英語を学び始めた私が、買ってもらったばかりの英和辞書をめくりながら、この二冊の解説にとりかかったことは、よく覚えていいる。それが、私の翻訳初体験だった。何が書いてあるのかわかっていくのは、暗号を解くようなおもしろさだった。といってもマザーグースについては、「おかしな詩」という印象がぬぐえず、自分の解釈が間違っているのか、もともとへんな詩なのか当時はよくわからなかった。

大学は仏文科に入った。子どもの本を研究したいと思っ

たら仏文科には入らなかっただろう。でも、その時は大人の小説を理解したいと私は思っていたのだ。仏文科の授業の一つに「現代詩の研究」があった。ポール・エリュアールの訳詩集なども出されている高村智先生が担当で、毎回プリントが配られて学生は自分なりの訳詩を試みるのだった。受講生が少ないせいもあって、先生は私の訳はなかなかよいとほめてくださり、そのうち「詩学」という雑誌に訳を載せてみないかと、声をかけてくださった。自分の翻訳が活字になったのは、この時が初めてだった。大学に通うかたわら日仏学院にも通っていたので、「日本語とはまったく系統が違う言語のおもしろさ」をわかりかけてきた時期だった。

大学を卒業した私は、文化出版局という出版社の書籍編集部に入った。文化出版局では当時絵本を出版し始めたばかりで、私はその部署に配属された。当時は、自分にもまわりにも子どもがいなかったので子どもの本の編集という職務が不満で、「おとなの本もやらせてほしい」と課長に訴え出たこともある。課長が「子どもの本をきちんと出す